

セメント樽の中の手紙

葉山嘉樹

青空文庫

松戸与三はセメントあけをやっていた。外の部分は大して目立たなかったけれど、頭の毛と、鼻の下は、セメントで灰色に蔽おおわれていた。彼は鼻の穴に指を突っ込んで、鉄筋コンクリートのよ
うに、鼻毛をしゃちこばらせている、コンクリートを除とりたかつたのだが一分間に十才ずつ吐き出す、コンクリートミキサーに、
間に合わせるためには、とても指を鼻の穴に持って行く間はなかつた。

彼は鼻の穴を気にしながら遂とうとう々々十一時間、——その間に昼飯と三時休みと二度だけ休みがあつたんだが、昼の時は腹すの空いてるために、も一つはミキサーを掃除していて暇がなかつたため、

遂々鼻にまで手が届かなかつた——の間、鼻を掃除しなかつた。彼の鼻は石膏細工の鼻のように硬化したようだった。

彼が仕舞時分に、ヘトヘトになつた手で移した、セメントの樽から小さな木の箱が出た。

「何だろう？」と彼はちよつと不審に思ったが、そんなものに構つて居られなかつた。彼はシャヴルで、セメントにセメントを量り込んだ。そして柵から舟へセメントを空けると又すぐその樽を空けにかかつた。

「だが待てよ。セメント樽から箱が出るつて法はねえぞ」

彼は小箱を拾つて、腹かけの井の中へ投げ込んだ。箱は軽かつた。

「軽い処を見ると、金も入っていないええようだな」

彼は、考える間もなく次の樽を空け、次の榼を量らねばならなかった。

ミキサーはやがて空^{からまわ}廻りを始めた。コンクリがすんで終業時間になった。

彼は、ミキサーに引いてあるゴムホースの水で、一^ひと先^まず顔や手を洗った。そして弁当箱を首に巻きつけて、一杯飲んで食うことを専門に考えながら、彼の長屋へ帰って行つた。発電所は八分通り出来上つていた。夕暗^{そび}に聳^{えなさん}える恵那山は真つ白に雪を被^{かぶ}つていた。汗ばんだ体は、急に凍^{こご}えるように冷たさを感じ始めた。彼の通る足^{あしもと}下では木曾川の水が白く泡^{あわ}を嚙^かんで、吠^ほえていた。

「チエツ！ やり切れねえなあ、かかあ嬢は又腹を膨ふくらかしやがったし、……」彼はウヨウヨしている子供のことや、又此寒さを目がけて産うまれる子供のことや、滅茶苦茶に産む嬢の事を考えると、全くがっかりしてしまった。

「一円九十銭の日当の中から、日に、五十銭の米を二升食われて、九十銭で着たり、住んだり、べらぼうめ篋棒奴！ どうして飲めるんだい！」

が、フト彼は井の中にある小箱の事を思い出した。彼は箱についてるセメントを、ズボンの尻でこすった。

箱には何にも書いてなかった。そのくせ、がんじょう頑丈に釘づけし
てあった。

「思わせ振りしやがらあ、釘づけなんぞにしやがって」

彼は石の上へ箱を打ぶつ付けた。が、壊われなかつたので、此の世の中でも踏みつぶす気になって、自棄やけに踏みつけた。

彼が拾った小箱の中からは、ボロに包んだ紙切れが出た。それにはこう書いてあつた。

——私はNセメント会社の、セメント袋を縫う女工です。私の恋人は破砕器クラッシャーへ石を入れることを仕事にしています。そして十月の七日の朝、大きな石を入れる時に、その石と一緒に、クラッシャーの中へ嵌はまりました。

仲間の人たちは、助け出そうとしましたけれど、水の中へ溺おぼれ

るように、石の下へ私の恋人は沈んで行きました。そして、石と恋人の体とは砕け合つて、赤い細い石になつて、ベルトの上へ落ちました。ベルトは粉砕筒へ入つて行きました。そこで鋼鉄の弾丸と一緒になつて、細く細く、はげしい音に呪の声を叫びながら、砕かれました。そうして焼かれて、立派にセメントとなりました。

骨も、肉も、魂も、粉々になりました。私の恋人の一切はセメントになつてしまいました。残つたものはこの仕事着のボロ許りぼかです。私は恋人を入れる袋を縫つています。

私の恋人はセメントになりました。私はその次の日、この手紙を書いて此樽の中へ、そうと仕舞い込みました。

あなた^うは労働者ですか、あなたが労働者だったら、私を可哀^{かわいそ}相だと思つて、お返事下さい。

此樽の中のセメントは何に使われましたでしょうか、私はそれが知りとう御座います。

私の恋人は幾樽のセメントになつたでしょうか、そしてどんなに方々へ使われるのでしょうか。あなたは左官屋さんですか、それとも建築屋さんですか。

私は私の恋人が、劇場の廊下になつたり、大きな邸宅の堀^{へい}になつたりするのを見るに忍びません。ですけれどそれをどうして私に止めることができましょう！ あなたが、若し労働者だったら、此セメントを、そんな処に使わないで下さい。

いいえ、ようございます、どんな処にでも使つて下さい。私の恋人は、どんな処に埋められても、その処々によつてきつといい事をします。構いせんわ、あの人は気象きしやうの確しつかりした人ですから、きつとそれ相当な働きをしますわ。

あの人は優やさしい、いい人でしたわ。そして確かりした男らしい人でしたわ。未まだ若うございました。二十六になつた許ばかりでした。あの人はどんなに私を可愛がつて呉れたか知れませんでした。それなのに、私はあの人に経帷布きようかたびらを着せる代りに、セメント袋を着せているのですわ！ あの人は棺かんに入らないで回かいてん転窯がまの中へ入つてしまいましたわ。

私はどうして、あの人を送つて行きましよう。あの人は西へも

東へも、遠くにも近くにも葬ほうむられているのですもの。

あなたが、若もし労働者だったら、私にお返事下さいね。その代り、私の恋人の着ていた仕事着の裂きれを、あなたに上げます。この手紙を包んであるのがそうなのですよ。この裂には石の粉と、あの人の汗とが浸しみ込んでいるのですよ。あの人が、この裂の仕事着で、どんなに固く私を抱いて呉れたことでしょう。

お願いですからね。此セメントを使った月日と、それから委くわしい所書と、どんな場所へ使ったかと、それにああなたのお名前も、御迷惑でなかったら、是非々々お知らせ下さいね。あなたも御用心なさいませ。さようなら。

松戸与三は、湧わきかえるような、子供たちの騒ぎを身の廻りに
覚えた。

彼は手紙の終りにある住所と名前を見ながら、茶碗に注いであ
った酒をぐつと一息に呻あおった。

「へべれけに酔っ払いてえなあ。そうして何もかも打ぶち壊して見
てえなあ」と怒鳴った。

「へべれけになつて暴あばれられて堪たまるもんですか、子供たちをどう
します」

細君がそう云った。

彼は、細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。

(大正十五年一月)

青空文庫情報

底本：「全集・現代文学の発見・第一巻 最初の衝撃」学芸書林
1968（昭和43）年9月10日第1刷発行

入力：山根鋭二

校正：かとうかおり

1998年10月3日公開

2006年2月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

セメント樽の中の手紙

葉山嘉樹

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>